

バーナム氏のこと

川崎 俊一

今年の春三月十一日明けがたに氏は逝つた。かねて健康をそこねてゐたのを、その二週間ばかり前に家の高い所から落ちて骨を挫いたのが因で終に世を去つてしまつた。氏の八十二年の長い生涯はこゝに幕を閉じたのである。さはいへ、その一生は誠にたふとい一生であつた。あの浩瀚なゼネラルカタログ——二重星總目錄——こそは朽つる時なき記念碑として氏の勳を永遠に傳へることであらう。

バーナム氏は千八百三十八年の十二月十二日に合衆國の東北部なるバーセント州に生れた。早くから速記者の職を得て、七十歳の高齡までシカゴ地方裁判所の書記を務めた人である。それ故リツク天文臺にゐた四年間を除いたなら、全く素人天文學者として始終した人だといふ事が出来る。氏が如何にして天文學に興味を持つ様になつたかは定かに知るよしもないが、恐らくは外の多くの素人と同じ経路をたどつたものと思はれる。氏は自らいつてゐる「確

か千八百六十一年だつたと思ふ、ロンドンに居た時私は粗末な望遠鏡を買つた。口径は三寸だつたが、景色をながめるにこそ役立て、天文用としては何の役にもたゝなかつた。それから五六年後に三寸四分の三のを買つた事がある。これは赤道儀装置もあつたりして可なり役にはたつたけれど、決して充分な器械とはいへなかつた。千八百六十九年に私は圖らずもシカゴでクラーク氏に會つた。その結果私は氏の會社へ六寸の赤道儀を注文したので。星の像が充鮮かに見える様にする事と、二重星の觀測が遺憾なく出来る装置をする事を特に注文して置いた。どうした事か知らないけれど、以前から私の心は殆ど二重星にばかり注がれてゐたのである。故意に二重星を選んだわけではない、全く自然に知らず知らずにそれを研究する様になつてしまつたのだ』氏はさういつた。バーナム氏と二重星との腐れ縁がかうして知らず知らずに結ばれたのだとしたならば、因縁といふ奴はどこまでも奇妙な奴だといひたくなる。他人が見れば全く腐れ縁とも見えるまでに氏と二重星との關係は深い。

氏にさき立つて三十年ばかり前に、ストルーフエ
 父子は九時と十五時の望遠鏡で北天の二重星をさが
 してしまつてゐたので、當時世にある望遠鏡をもつ
 てしては最早それ以上の二重星の發見は不可能の事
 と考へられてゐた。それにもかゝはらずバーナム
 氏は僅かな六時を相手に、ウエブのセレスチャル・
 オプゼクツの寫本を唯一の参考書として仕事を始め
 『曉の光が彼を寢床に追ひやるまで』熱心に空を見つ
 めて、終に千八百七十年の四月二十七日に、一つの
 新しい二重星 ω を發見した。それを手始として
 發見は次から次へと續いて千八百七十三年に發表し
 た目録には八十一個の新二重星を載せる事が出來
 た。そればかりではなかつた、その頃の大家でさへ
 今に發見の種ざれになるだらうと多寡をくゞつてゐ
 たにもかゝはらず、發見は確實な步調で進んで行つ
 たのであつた。氏のすぐれた力はやがて氏に各所の
 天文臺の望遠鏡を使ひ得る特典を齎した。即氏はデ
 ーアポーン、ウヲツシユバーン、リック、エルケス
 等の天文臺の、十二時から四十時までの各種の望遠
 鏡で觀測に従事し、ダートマウス大學の九時半、ワ

ーナーの十六時、海軍天文臺の二十六時をも手にす
 る事が出來た。これ程澤山の望遠鏡をうまく使ひこ
 なして見事にやつてのけた人はバーナム氏以外に
 はまたとあるまいと思はれる。氏の發見した二重星
 の數は前後一千三百四十程にのぼつた。そのうちの
 少くとも四百五十一はかの有名な六時で確實に發見
 せられたのだといふ。氏の二重星にはハーシエルや
 ストルーフエの目録にない二つの新しい種類が含ま
 れてゐる。二つの星が一秒の五分の一位の近くにま
 で接してゐるもの、非常にかすかな星が明かな星と
 つらなつてゐるもの、かういふ種類は氏によつて始
 めて見出されたのであつた。

然しながらこの驚く可き發見はバーナム氏の貢
 獻のほんの一部分に過ぎなかつた。千八百九十四年
 に英國の王立天文協會は氏の發見に對してあの『ゴ
 ールドメダル』をおくつたのであるが、その後の氏
 の功績はもう一つ『ゴールドメダル』を贈りなほさね
 ば勘定が合はぬ程偉大なものであつた。氏は二重星
 の性質を見分けて、測定に必要な二重星をその鋭い
 眼と無比の熟練とを以て測定した。その數は何萬に

も及ぶであらう。この測定は貴い測定である、今日二重星の軌道を計算する人はパーナム氏の得た數だといへば安心してそれに頼る程に氏の測定は正確であつた。氏自身もまた澤山の軌道の計算をしてゐる、二重星に關する事ならばあらゆる方面の研究をした人であつたのだ。

これ等、價値のつけ様もない貴重な研究が、専門家ならぬ一人の手にされた事を思うて私は更に驚くのである、前に氏はこんな事を書いてゐた『一週間のうち少くとも六日は天文学とは似ても似つかぬ仕事のために一日の八九時間以上を費してゐた。天文学上の研究や觀測はかういふ生活の暇々にした事であつた。』

初め氏が發見につとめた時には、氏は手近に天文の書籍が充分にない爲に大きなハンデキャップをつけられてゐた、『色々のものを發見しても参照すべき文獻は一つもなかつた、何しろ私の手もとでは例のウエブの第一版が一番幅を利かしてゐる始末だ、それにその頃は二重星てふ題目のある天文学の書籍はシカゴ中探したつて殆ど見つからなかつた。』二重星

そのものゝ發見よりも参考書籍の發見の方が六かしかつたといつてゐる。何よりも氏は既に知られた二重星の、完全なカタログの必要を切に感じた。それ故氏はこゝにも持ちまへの勇猛心をふり起してあらゆる記録を集め、それに新しい發見と測定とを追々につけ加へて、初めて缺くる所なき文庫を創成したのであつた。カーネギー、インスチテューションはこの努力の價値を認めて、その第五の刊行物として印刷に附することとした、これ即ち有名なるゼネラル・カタログの、あの尨大な二巻の生れた所以である。印刷に先だつて氏は萬一の誤謬をのぞく爲に記録全部を調べ直し、尙その上に發表せられてゐなかつた物をも探し求め、今までかへりみられなかつた星の測定を更に新に一萬ほごつけ加へた。この校訂をするにさへ五年の歳月を要したいといふことである。かくして完成したゼネラル・カタログのたふささはいくら述べても述べざる事が出来ない。それは二重星の歴史であり二重星の尺度である、實に二重星天文学の基礎はこれによつて初めて確立したのであつた。この書の刊行せられた時、氏は六十八歳であつた

が、ローレルをいたゞいて、そのまゝ退かうとは夢にも思はなかつた。ゼネラル・カタログの編纂中に星の固有運動の問題について感ずる所あり、千九百七年から十二年までの五年間にエルケスの四十時によつて凡九千五百の星の固有運動を測定した。その結果もまた同じカーネギ・インスティテューションの手によつて一卷の書となつてあらはれてゐる。

千九百十二年の十二月、はげしい寒さが氏の健康を害した。翌月の十一日の日附で『私は生れて初めて病氣になつた、今は疲れきつてゐる、回復する日までは天文臺行きは見合はさう』といつてゐる、氏は再びたゞなかつた、そして今光榮のうちに逝つたのである。(ジャツクソン氏その他に據る)

星

菜 井 子

笑むと見ゆる瞳の裡に涙ありや

星夜ながらに降る時雨はも

星がする秋の歎きの涙をば

時雨と呼ぶやこの一しづく

朕東京天文臺官制ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

御名 御璽

大正十年十一月二十二日

内閣總理大臣 子爵高橋是清

文部大臣 中橋徳五郎

勅令第四百五十號

東京天文臺官制

第一條 東京帝國大學ニ東京天文臺ヲ附置ス

第二條 東京天文臺ハ天文學ニ關スル事項ヲ攻究シ天象觀測曆書編製、時ノ測定、報時及時計ノ檢定ニ關スル事務ヲ掌ル

第三條 東京天文臺ニ左ノ職員ヲ置ク

臺長

專任二人

委任

技師

專任二人

判任

書記

專任三人

判任

第四條 臺長ハ技師又ハ東京帝國大學理學部ニ屬スル教授ノ

中ヨリ文部大臣之ヲ補ス

臺長ハ東京帝國大學總長監督ノ下ニ於テ天文臺ノ事務ヲ掌

理ス

第五條 技師ハ臺長ノ命ヲ承ケ天文學ニ關スル事項ノ攻究及

技術ヲ掌ル

第六條 書記ハ上官ノ指揮ヲ承ケ庶務ニ従事ス

第七條 技師ハ上官ノ指揮ヲ承ケ技術ニ従事ス

附 則

本令ハ公布ノ日ヨリ之ヲ施行ス

明治二十一年勅令第八十一號ハ之ヲ廢止ス